

武蔵野日曜聖書講筵

否定道

—— 詩篇第1篇 ——

1976年9月26日

小池辰雄

詩篇翻訳の序文 歩まず、立たず、坐らず 道德法 生命の靈法 水の流く辺に植えられて
活ける水源なる神 神に対して「然り」、己に対して「否」 否定道は神に対する絶対肯定道
自己肯定・自己義認・自己弁護 キリストが十字架で否定道を開いた キリストの本願の効力
に全託 孤軍万軍 祈り

【詩篇1】（私訳）

- 1 さいわいなる哉、この人！ この人は
悪の徒の謀略に歩まず、
罪びとの途にも立たず、
嘲者の座にも坐らず、
2 反つて、エホバの法にこそ、その歡喜があり、
聖法をば憶う昼も夜も。
3 その存在は木にぞ似る、水の流く辺に植えられて、
その期到らばその実を結び、
その葉もまた凋落むなき。
かかるがゆえそのなすところみな栄えゆく。
4 然かはあらず、かの悪の徒は。
むしろ似る、風の吹き去る粉殻に。
5 されば悪の徒は審判に立ち得ず、
また罪びとは義人の集いに。
6 宜べ、エホバは義人の道を知り給う。
されど、悪の徒の途は亡びる。

● 詩篇翻訳の序文

今日は詩篇の第1篇です。詩篇というのは、ちょうど日本の万葉集みたいに約千年にわたって読み人知らず、

「これは誰々の作である」



ということを学問的に決定できるものは一つもない。ダビデの名前がたくさん書いてありますけれども、学問的には果たしてダビデであるかは分からない。むしろ、その分らないのがいいところですね。いろいろな人が書いたのが、いろいろな時代を経て編纂されて、今、詩篇150篇という形になったわけなんです、それは極めて新しいこと。新しいといっても紀元前ですけれども。

詩篇の翻訳をしたときに私はこういう序文を書いた。ちよつとご参考に読んでみます。

「あるとき私はおのが胸底に呻きあることを知った。まことに私は本来、彼の憐れみなくば立場なき者である。希望が私にあるならば、それはただ彼の十字架と復活のゆえである。人に責めらるるも、誤るるも、何かあろう。砕けたる魂は、義が天にかたく立ち、栄光が御名に帰せらるることを喜ぶであらう。この口はパンをくらわんために存するにあらず、人に訴えんための言葉にあらず、まず神と語り、神に生きんがためである。本当に生きようとするところには、必ずや負うべき何ものがある。戦うべき何事かがある。苦難と戦闘なき生活は偽りであり、神との活ける交わりなき人生は空の空である。外に悪の世あり、内に罪の心あり。神を知りたる者にとっては、生きることはそれ自体が人に対し、己に対して十字架である。これを負う力は彼キリストにある。我らの心魂の態度は祈りであらねばならない。あるがままの己を彼に投げ出してしまふことである。曠野をその揺籃とせし民が血と涙の歴史を以て編みし祈りがある。『詩篇』即ちこれである。近世の暁鐘をうち鳴らしたる預言者は、これを「小聖書」(eine kleine Bibel)と呼んだ。個人の生涯が祈りであるかぎり、ユダヤに咲きしこの花は我らの胸にも咲きかえらねばならぬ。祈禱書は焼かれ、人おののの見えざる自由の文字がこれに代わり、新しき葡萄酒は新しき革袋に盛らるべきである。もとより力に余る難路ではあるが、聖霊の自由の灯火を力に弱き翻訳の足を運ばつと思つ。およそ義のため愛のため苦しみまた忍ぶ見知らぬ旅人を、緑の丘あり憩いの汀ある祈りの国に渡すべき小舟の渡守ともこの翻訳がなり得るならば、舟びとの歌は感謝と讃美の外何ものでもない。」(『旧約知識』1934年4月に掲載)

そういう序言です。これを書いたのがいつでしたかね、だいぶ昔のはなしです。この序言を書いて詩篇3篇を翻訳して解説をして、その時に真つ先に手紙をくださったのは三谷隆正先生(1889～1944)でした。三谷先生が非常に今読んだ序言に感激されて手紙をくださった。今でも忘れることができない。

●善と悪の対立

それでは、この詩篇第1篇というのを、私は自分の訳を読みます。これは原文の韻律に従つて相当苦心した訳です。

「さいわいなる哉、この人！ この人は



悪の徒の謀略に歩まず、
 罪びとの途にも立たず、
 嘲者の座にも坐らず、

2 反つて、エホバの法にこそ、その歡喜があり、
 聖法をば憶う昼も夜も。

3 その存在は木にぞ似る、水の流く辺に植えられて、
 その期到らばその実を結び、
 その葉もまた凋落むなき。

かかるがゆえそのなすところみな榮えゆく。

4 然かはあらず、かの悪の徒は。
 むしろ似る、風の吹き去る粉殻に。

5 されば悪の徒は審判に立ち得ず、
 また罪びとは義人の集いに。

6 宜べ、エホバは義人の道を知り給う。

されど、悪の徒の途は亡びる。

そういう訳です。非常にユダヤ的な響きの詩篇です。なぜ私が「ユダヤ的」というようなことを言うかというところ、善と悪、義と罪、光と闇、その対立が非常にはっきりしているわけです。

1 さいわいなる哉、この人！ この人は
 悪の徒の謀略に歩まず、

少し言葉の解説を先にいたしましょうか。「さいわいなるかな」というのは

「アシュレー」

という字ですが、これは複数形に使われていますが、他にヘブライ語では、

「バーラック」

という言葉があつて、「恵まれたるかな」という意味の「バルーク」です。スピノザの名前は、「バルーク・スピノザ」という。あの「バルーク」というのは「恵まれたるかな」という。「ベアティテュード」「ベアトリーチエ」、みんな同じ種類の言葉です。この詩篇ではこの「アシュレー」という言葉はほとんど神讚美にだけ使われています。

「悪の徒」という字は

「レシャーイーム」

という字ですが、「ラーシャー」という言葉からくる。「イーム」という語尾は複数です。「悪の人々」という。これは一番出てくるのは、詩篇と箴言。即ち、多少、教訓的な箴言のようなどころに出てくる。しかし、この「レシャーイーム」という字は、

「義人」「ツエディーキーム」



という言葉に対する言葉で、「悪」といいましても、神がなく、神を信じない、傍ら神無きがごとき傍若無神というやつ。ただ道徳的に悪というよりももう少し深い意味をもっています。そして、恒心、恒つねの心がなく、真理から遠ざかり、神から離れているから、平安がないわけです。だから、道徳的にも、いつでも悪の方に向かっていく可能性を充分持っている。そういう気持がこの「悪」「ラーシャー」という字からくる響きです。

●歩まず、立たず、坐らず

その次に、そういった謀り、そういった者のいろんな権謀術数に歩まず、

罪びとの途みちにも立たず、

と。「罪びと」は

「ハッターイーム」

という字ですが――「ハッター」「単」という字――これは新約的な意味の「罪びと」という意味ではない。これはモーセの律法を現実に犯すことを常習としているようなご連中。これが罪びと――新約でいう「罪びと」はもつと深い意味です――犯罪者という、律法に対する犯罪です。いわゆる法律とは多少違いますけれども、モーセの律法は宗教的な角度を充分持っていますから。そういうのがこの「罪びと」。それから、

嘲者あざけりの座すわにも坐らず、

「嘲る人」「レーツイーム」という字ですが、これは神聖なもの、真理、およそそういった事態に対して鼻であしらうような、即ち、パウロが言っている「不虔不義ふけん」という、あの「不虔」の方です。すべて鼻であしらってしまうような嘲りの者。ちょうどサタンの、メフィストフェレス的な存在。聖霊の敵サタンと同質なもの。ところが、この「嘲る」という言葉は実はこの詩篇にここ一か所にしか出てこない。一番近代的な罪ですね、これは。だから、現代にはむしろこういうのが多い。

「神なんか何だ。宗教なんか何だ」

なんていうような調子なのが多いわけです。

「悪の徒」「罪びと」「嘲りの者」

という三つの種類をあげて、これで人間の神に反している在り方の事態をこの三つがぜんぶ表しているようなわけです。神に背いているのと、律法に背いているのと、それからおよそ事柄をバカにするのと。そういつて、

「歩まず、立たず、坐らず」

という。おもしろいですね。始めは「歩まず」と言って、その次は「立たず」と言って、その次は「坐らず」と言っている。満月がだんだん欠けていくと、「いざよいの月」(十六夜)とか、「立待月たちまちつき」(十七夜)とか、「寝待月ねまちつき」(十九夜)とかありますが、それと似たような表現の仕方です。



これはみな「そういったことはしない」という否定です。否定の強い否定はヘブライ語の「ロー」

という字ですが。

「ロー・ハーラック、ロー・アーマッド、ロー・ヤーシャブ」

といって、そういったことに対して、

「自分はそういった謀りごとに歩まず、そういった途にも立たず、そういった座にも坐らない、そういった人」

というのは、詩人がある人を指しているわけです。

「そういう人は誰であろうと幸いである」

と。そういうことではなくて――「キーイン」といつて強いんです――それに反して、

2 反つて、エホバの法にこそ、その^{よろこび}歡喜があり、
聖法をば^{おも}憶う^{みのり}昼も夜も

「エホバの法」「聖法」と訳しましたが。2節は非常に大事な節です。

「ベ・トラツツ・ヤーヴェー」「ヤーヴェーのトララー」

モーセの「律法」のことを「トララー」という。それを喜ぶ。それから片一方は「憶う」と。昼も夜も、四六時中おもっている。

神法、ヤーヴェーの律法、聖法――何といつてもいいですが――それを喜んでいるという。この「喜ぶ」というのが大事なんです。一生懸命で守ろうとしているのではない。喜んでいる。そして、昼も夜もおもわざるをえないと。ユダヤ人は正直、律法を非常に喜ぶという、直線的な、樂觀的なところがあるわけです。

まあパウロなんていうのも、サウロ時代は律法を拳々服膺^{けんけんふくよう}し本当にこれを喜んで守っていたんでしょうね。もちろんそればかりではないですけども、そういう面があったでしょう。

●道徳法

「福音」は「よろこびのおとずれ」という。

「ユーアンゲリオン」「フローエ ボートシャフト」

人生は、どういうことでも、歡びというところになければダメなんです、何をやってでも。喜びというところになければ本ものでない。キリストは、「キリスト教」なんて仰らない。

「福音、喜びの音信を受けとれ」

と言う。だから、

「法を喜んで、それを昼も夜もおもっている」

と。ところが、クリスチャンでも、福音を本当に喜びの音信としてよこんでいる人が果たしてどれだけいるか、というようなところもありますよね。



「法」という字は——「ヨルダン」という字が「ヤルデー」^ン「くだる」という字からくる——即ち、「水は流れ去る」という。水は流れ去るのが自然の法則である。だから、「法」といった。漢民族は素晴らしいですよ。法という字を、水が流れいく自然現象をみて、これが自然の法則であるというので、「法」という字を作ったんだから。自然界の法則と道德界の法則がある。

「人間は先験的^{せんけん}に善に従う。道德法に対する先験的な判断をもっている」

ということをカントの道德哲学が言っているわけです。『道德哲学原論』という本が岩波文庫に最近、篠田英雄さんが訳していますが、これはカントの道德哲学を学ぶのに最初にとりあげるいい本ですから、ご紹介しておきます。実は、藤井先生と日曜日の午後にそれを原文で一緒に読んだことがある。

「グルントレーグング ツール メタフィジーク デア ジッテン」

(Grundlegung zur Metaphysik der Sitten)

という本ですが。

「善意志」「善なる意志」「グーテル ヴィレ」(guter Wille)

は、人間に生まれつきあるところの善意志。良心のことです、簡単な言葉でいうと。

「世界の内にも、また世界の外にも、これは無条件に善といわれるものは善意志の他にない」

という有名な言葉です。そういった「善意志」、良心。そういった道德法則。カントが『実践理性批判』の終わりの方でも、

「これをおぼえ思ふほど、自分は驚嘆と畏敬の念をもつて思わざるを得ないところの二つのものがある。それはわが頭上の星辰の空と、わがうちなる道德の法である。」

「自然界の法則と、人間の心の中の法則、道德法。これは厳として存する。誰も道德が守れなくても、道德の法則は厳としてある」

と言った厳かなカントの宣言です。

●生命の靈法

そこで、もう一つある。神法、靈法、聖法というのがあつた。これはローマ書8章の2節、^{いのち}「生命の御靈の法^{みたまのり}」です。

「生命の靈法、キリストの生命の御靈の法は私たちを死と罪とサタンから解放してくれた」

ということをパウロが言っているわけです。モーセに示されたところの律法は道德法則よりもむしろ靈法を基としているわけです。

「汝、わが顔の前に何ものをも神とすべからず」

という。宗教的なものです。



「汝にとつては、わが顔の前に、いかなるものも、いかなる神々もないぞ。ほかの民族には神々はあるけれども、お前にとつては、私が神だ」

という。それからあの中に道徳法則が出てくるね。

「汝、殺すなかれ。姦淫するなかれ。盗むなかれ」

と。あれもみんな「ロー」という字が使つてある。ところが、ここは

「立たず、歩まず、坐らず」

でしょ、この「ロー」は。ところが、モーセの十誡はあれも「ロー」が使つてあるのに、

「殺すなかれ、盗むなかれ、姦淫するなかれ、偽るなかれ、貪るなかれ」

なんて、みんな「なかれ」にしているけれども、本当は、

「汝は殺人はしない。殺人すまじ。姦淫はしない。盗まない」

といつて、本来はその奥は、神さまの方からこちらを信じかかつている宣言である。

「律法の奥は隠れたる福音である」

と私が言っているのはそのことなんです。「すべし、すべからず」ではない。

「そんなことは、お前はしない。私が神さまだから。私との関係がちゃんと立つて

いれば、お前はそんなことはできるはずがないぞ」

というのが、律法の根本精神だと申し上げています。なかなかそういうことを普通の牧師

さんが言わない。また聖書の翻訳が「なかれ」になっている。私に訳させれば、

「汝は殺人せず」

あるいは、

「汝は殺人せじ」

と訳します。その方がずっと強い。

「すべからず」

なんていうと、

「ひとつ、してやれ」

なんていう反対の衝動が起きる。

「律法は罪を刺激する」

とパウロが言った。いわゆる律法は罪を刺激する。だけれども、相手を信じかかつていくと、

「そうか、私はわるかつたな」

といつて、逆に悔改める。学校の先生が

「お前たちはよく勉強する」

と言つと、怠け者は

「こいつはいかな」

と。反対に、

「勉強しろ」



というと、

「怠けてやれ」

なんて、逆になる。

何でも大事なのは要するに信、愛、関係なんです。労使関係でも、学校でも何でもかんでも、みんなそうです。この信愛がなくなってしまうって、

「権利義務の、要求の、何のかんの」

とやっているから、いつまでたつても始まらない。「ストライキ、ストライキ」だ。忍ぶこともしないし、だんだん悪くなるばかりです。それよりか、我慢して忍んでやっていれば今度は、

「感心だな」

といって逆に、資本家が大いに労働者に恵みを施すようになるわけだ。お互いがよくなってくる。もうすべては機構ではない、組織ではない。もうひとつ奥の本当に有機体的な人格関係です。人間の世界は人格関係がなくなったら、おしまいですよ。

その人格関係を本当にやっていくためには、ただ道徳ではどうにもならんから、もうひとつ奥の霊法の世界に入ってこなければ。だから、私は、

「万人は宗教を要する」

と言っている。救いを要しない人は一人もないわけだ。なぜ宗教から逃げていくか。もういやになってしまいうな。死ぬまで私は叫んでいきますから。仕方がない。叫ばざるを得ない。

●水の流く辺に植えられて

とにかく、律法を喜んでいる。そして「昼も夜も憶う」と。これは、

「クリスチャンはこれに及第しますか？」

というわけだ。クリスチャンは落第してしまう。そうすると、

3 その存在は木にぞ似る、水の流く^{ゆべ}辺に植えられて、

その期^{とき}到らばその実を結び、

その葉もまた凋落^{しぼ}むなき。

と。自然に木が常木^{とこぎわぎ}だ、葉がしばまない。常木、常緑樹、エバーグリーン。学者は「この節は多分エレミヤの言葉を想いだして中に入れたのだろう」なんてことを言う。

使徒行伝13章33節には「詩篇第1篇」と書いてあるけれども、本当は「第2篇」のこと。現在の詩篇の第2篇の7節を引用して、

「それは第1篇に書いてあるわけだが」

と書いてあるので、第2篇を第1篇と言っているのだから、詩篇の第1篇というのはあと



から付け加えたのだという。全体の詩篇の総序としてあとから付け加えた。だから、詩篇第1篇は非常に新しいものだということを学者は結論するわけです。そういうわけで、実は第2篇が旧の第1篇なんです。

エレミヤの17章の7節にそういう言葉があるから、まさにそこから来ていると思ってい。だいたい、詩篇の中には預言者の言葉がずいぶん入っている。詩篇のグルント(元)はむしろ預言者の方に大いにあるということは、ある意味において言えるわけです。

「おおよそエホバをたのみエホバをその侍とする人は福なり」(エレミヤ17・7)

と。これは詩篇第1篇の1節よりも素晴らしい言葉ですよ。「……しない者はさいわいなり」なんていうよりも、

「神さまによりたのむ者がさいわいだ」

という方がもとです。だから、詩篇第1篇は、ユダヤ的な、教訓的な、律法的な角度をもったということを今申し上げているわけです、相対的な歴史的な判断として。けれども、詩篇第1篇を私は最後に新約の光で読みますから、そのときはまた変わってくる。

「7おおよそエホバをたのみエホバをその侍とする人は福なり。8彼は水のほとりに植えたる樹の如くならん。その根を河にのべ、炎熱きたるも恐るるところなし。その葉は青く早の年にも憂えずして、絶えず果を結ぶべし。」(エレミヤ17・7～8)

今年はヨーロッパは大ひでりだったけれども、それでも大丈夫だという。この「水」は地下水のことです。雨が降ろうが降るまいが、もうひとつ奥の地下水はいつも涸れない。

●活ける水源なる神

もうちよつとあとにおもしろい句がある。エレミヤ記17章12節、

「12榮えの位よ原始より高き者わが聖所たる者、13イスラエルの望みなるエホバよ凡て汝を離るる者は辱められん。我を棄つる者は土に録されん。此はいける水の源なるエホバを離るるによる。」

活ける水の源、水源なる神を離るるによりてダメだと。

14エホバよ我を医し給え、然らばわれ愈ん。われを救いたまえ、さらば我救われん。汝はわが頌るものなり」(エレミヤ17・12～14)

13節、14節は著しい言葉だね。この辺をダンテが「天国篇」30曲のところで引用している。あるいは、13節、14節あたりは黙示録の21章、22章に相応するようなどころだね。

「神の都の水、川が流れて、両側に十二の樹があつて、その葉は癒す力をもっている」

なんて書いてある。なにしろ、人間は、自然界を損なうことは自殺行為なんだ。ゲートと



いう人は「神・自然・我」を融合した境地で生きていた。ゲートというのは素晴らしい詩人です。

草根木皮がよくつて、ヨーロッパ的な化学的な薬は局所的に一時的には必要とすることもあるでしょうけれども、本質的にはやはり自然がもっているところのものがいい。東洋には本来、自然との深い交わりと、自然と融け合っている、また尊ぶところがあるのだから日本人はそういう自分の本来もっている角度を失ってはいかん。

そういう地下水、水のほとり。ですから、これは涸れない。我々にいわせると、地下水は聖霊であります。これはキリストがヨハネ伝の4章と7章で仰っている。サマリヤの女との会話で、

「私の与える水を飲む者は、腹から泉が湧き出でてしょうがない。喉の渇きがない。本当の生命が枯渴しないぞ」

という。

「この水は聖霊のことである」

と7章にある。そういう聖霊の事態。これが即ち、

「水のほとりに植えられた樹」

という、聖霊を地下水的にもっている人間。それは生命が枯渴しません。

「外なる人はたとえ衰えても、内なる人は日々新たに新たなり」

とパウロが言ったような、生命力を、霊的生命力をもっている。

「小池先生は、なぜ、あのように元気なのか？ どういう運動をしているのか、水泳をしているからか？」

なんて。水泳なんてのはただ枝葉のことにすぎない。いちばん大事な根つこの世界はこの地下水、聖霊をいただいているから、元気ならざるをえない。

「元気」というのは元の気。聖霊は元の気、神さまの元の気なんだ。元気というのは素晴らしい言葉です。根元の気、キリストがもっていた気であります。スピリッツ、ルーアツハ、プニューマです。

だから、本来2節、3節はきわめて福音的なんです。エホバの法を本当の法として喜ぶのは、さつき言った霊法、神の御霊の法だから。

「聖意」といいますね、聖なる意志。けれども、聖意はただ意志ばかりではない。聖意には必ず力が入っているんです、神さまの御意みこころというのは。神の御意には、

「わが言は霊なり生命なり」
ことば

というのは、

「わが意は霊なり生命なり」
こころ

で、力を持っているんですから。それを間違わないでください。御意を本当に受けとるところには必ず力がくるわけです。だから、体現する。体現していく。キリストがそれを本



当になされた。

●神に対して「然り」、己に対して「否」

⁴然かはあらず、かの悪の徒は。

むしろ似る、風の吹き去る粉殻^{もみがら}に。

⁵されば悪の徒は審判^{さばき}に立ち得ず、

また罪びとは義人の集いに。

⁶宜^うべ、エホバは義人の道を知り給う。

されど、悪の徒の途は亡びる。

神さまは義人の道を知っているけれども、悪の徒の途は滅びる。義人の道は栄えりと。

ところで、「義人」と書いてある。そうするとすぐユダヤ人は、この「義」という意味において、福音的な角度よりかもう少しズレた「義^{ただ}しさ」という面がある。それはもちろん神に対する義しさというようなことなんでしょうけれども、

「律法をちゃんと守っている義しさ」

だとか。私が言っているところの「義」というのは、

「アブラハム、エホバを信ず。エホバこれを彼の義となしたまえり」(創世記

15・6)

と。これは極めて大事な言葉です。

「アブラハムはエホバに対してアーメンと言いました」

というのが、「信ずる」という言葉。そうしたら、

「神さまはアブラハムをよしとしました」

というのが「義」ということ。即ち、神に対して「然り」と言わなければ、「義」ということは出てこないということです。人間の側の道徳的な判断の義とか何とかいうことではない。これが根本のことなんです、本当の義というのは。

だから、「義人」というのは、神の御意を、神に対して「然り」と言つて、己に対して「否」と言う。これが今私が言おうとしているこの「否定道」なんです。

相対的な意味で、いわゆる

「義しい信仰のある人」

とか何とかいって、それに対して

「信仰がなくて、罪びとで悪人で嘲り者」

と、そういう対立をこの詩篇第1篇でやっているわけだ。そういった相対的な、善と悪、光と闇、罪と義、敬虔と不義というような、そういう相対的な面がこの第1篇の一応のすがたなんです。

「それでは、私はひとつ大いに律法を拳々服膺し、律法を喜んでやっていこう」



といって、一生懸命になる。それを一生懸命にやったのがパウロだよ。それでパウロはもう素晴らしいパウロだと、自分でも思っていた。そして、

「あいつらはけしからん。律法も知らなければ、また破ったりして」

といって、パウロは自分を律法に非常にただしい者であるといって自らを誇っていた。それを

「パリサイ人^{びと}」

というんです。「別たれたる者」という意味です。即ち、

「自分たちは彼らとはちよつとちがうんだ、宗教的道徳的なチャンピオンだ」

といって、自認している連中。そして、他を見下しているようなのを「パリサイ人」という。それ自体はわるくはないけれども、とんでもない傲慢です。キリストがいちばん嫌いだっただのがこのパリサイ人なんです。

「律法の義につきては責むべきところなし」

とやっていたのが、この詩篇第1篇に出てくるところの義人の方のパウロなんだ。そして他の連中を、

「ダメだ、あいつらは。あいつらは滅びる。俺たちは栄える」

なんて思っているわけだ。そういう連中をキリストは嫌いなんだ。キリストの敵はこういう連中だ。悪人ではなかったんだ、キリストの敵は。

「私はもうしょうがない」

といって嘆いていたり、いろいろ肉体的にも欠陥のある人たち、爪弾きされている取税人だとか遊び女だとか、そういうのにキリストは味方になってくださっている。立派な連中はキリストの敵なんだ。

●否定道は神に対する絶対肯定道

これはなるほど、神に対する熱心なんだ。けれども、己を立てている。それを自己義認という。自己を義としている、義と認めている。ところが、この自己義認、自己弁護者が多いわけだ。人間は生まれつき自己義認、自己弁護の傾向をもっている。実はこれが「罪」なんです。いわゆる罪とか何とかいうよりも、霊的な傲慢が最高の罪なんです。キリストはこの

「神に対する熱心、己を立てている熱心はいかん」

というわけで——サウロ（パウロ）は分からないやつで、そして他のキリスト者を迫害していたから——

「なんぞ、私を迫害するか！」

と復活のキリストが顕れて、パウロをやっつけた。参ったです、パウロは。何のことかわからない、始めは。けれども、アナニヤに按手されて、聖霊を受けてから、



「わが眼より鱗のごときもの落ちたり」

といって、

「このキリストにはかなわん。俺は自分がいいと思っていただけ、とんでもない間違いだっただけ」

と彼は自己否定をやった。徹底的な否定です。これが否定道なんです。否定道は神に対する絶対肯定道なんです。

プロテスタントというのは、カトリックにプロテストすることではない。マルチン・ルターはカトリックの坊主になった。だから、カトリックの一員で、そしてカトリックに対して

「否（ナイン）！」

と言ったことは、自己自身に対して「ナイン」と言ったことなんだ。自分自身に対して「否」と言った。即ち、本当のプロテスタントというのは常に自分を乗り越えていく人間です。自己をよしとしていたらダメ。

ちょうどあれだね、あの『ファウスト』で、

「ある瞬間に対して、ああお前はうるわしいと言って、瞬間に対して満足したら、俺は

負けだ」

という賭けをメフィストフェレスにしたわけだ。ファウストは、追求してやまない。「これでいい」なんてところはない。地上で「これでいい」なんて言ったら大間違いだよ。

それで、己を超越して、己を乗り越えていく。超え打ち克つ。自己超越。自分なんてものは吐いて捨てるような気持ちでいる。そういう、自分なんてものを問題としないのを、私は、

「無者」

といっているわけです。無きに等しという。

●自己肯定・自己義認・自己弁護

自己を肯定して、「自主」だとか、「自由」だとか、人間の側を——いいですか、間違えては困るですよ——人間の側を手離して自主だの、自由だのと言っているのが、実はこれが「罪」なんです。高次な消息だから、間違えないようにしてください。

相対的な世界では、神をそちのけにした相対的な世界では、自主だの自由ということは、道德それ自体の世界では大事なことです。これはカントの『実践理性批判』でいっているように、

「アウトノミー」(Autonomie)「自律」

ということ。「他律」ではいかんと。

「人に言われるから、先生に褒められるから、罰せられるから、私はこういうことをしておきましょう」

なんていう、



「外側は道徳的にみえても、そんなのは他律でダメだ。自分で自らを律しろ。自律だ。自らを律して、そして道徳法則に尊敬の念をもってこれに自ら従っていけ」

とカントが言った。これが道徳の世界ではまさに真理です。そこに本当の自由がある。その通りです。道徳の世界ではそれでいいんですよ。

けれども実は、その自律も自由も本当はできない。ある程度はできているけれども、その自由がすぐ自我、我欲、我執と一つになる。そして、自由が勝手気ままな自由に移っているのが今の現状ではないですか、世の中の。

「自由、自由」

なんていったって、みんな自己肯定をやっている。そしてお互いになんのかんのとガタガタやっている。これはもう世界の歴史の終わりまで絶えません。ということは、手離しの自由、自律をやっているから実は偽りなんだ。表向きだけのなし。みんな内側では自己義認をやっている。自己弁護をやっている。

「これがいかん。これを徹底的に否定しろ」

と。ところが、本当に否定できますか。これをパウロがローマ書7章で嘆いている。

「ああ、我悩める人なるかな、この死のからだ」

といって苦しんだ。マルチン・ルターが独房でもって神さまの前に義たらんとしたが、どうにもならん。

「わがうちなる何ものかが、どうにもならん」

と。外側はまことに模範僧だけれども、自分の心は本当は喜んでいない。マルチン・ルターの宗教改革はそこではないですか。

●キリストが十字架で否定道を開いた

だから、それで否定しようと。否定しかかるが、ある時はできるかもしれないが、また自己が出てくる。そこがキリストの十字架を要するところです。

「私がぜんぶそいつはもう片づけたよ」

というのが、キリストの十字架なんです。

「もういいよ、心配しなくていいから。相対的なお前がどうであつたって、そんなことは苦にするな。私がお前を本当に否定してやった。私が本当の否定道を十字架をもつて開いた」

というのが、この福音の世界の否定道なんです。それで片づけられてしまった、私は。

「汝、霊の貧しからざる者」

と。自らを肯定するやつが霊が貧しくないやつ。ところが、

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

と。誰がこれに本当に及第できますか。誰も及第できない。キリストはしかし、水を割ら



ないで仰る。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

と。誰も天国には入れない。みんな落第生。みんな霊が貧しくない。霊が貧しくなれば自己義認はしないわけだ。ところが、みんな自己義認をやっている。私もその一人で、どうにもならん。そうすると、

「幸いなるかな、汝、わが十字架によつて、霊を完全に貧しくされた者」

と。相対的な私はダメですよ。もうひとつ奥のところに、霊が貧しくされているものがある。それが十字架を無条件に受けとったところにはある。そうすると、

「天国――神の霊の支配するところが天国――即ち聖霊、汝のうちにあり」と響いてきた。

「天国、聖霊の我、御霊の我、汝のうちにあり」

とこう響いてきた。だから、山上の垂訓の第一言は、パウロのガラテヤ書2章20節と同じものをそこにもつていた。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。キリス

トわがうちにありて生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

というのと同じことなんです。誰が今までそれだけのことを言ったというんだ。註解書にひとつも書いてない。

そういうところにきて、私は、

「十字架、十字架と無教会は言っているけれども、本当に聖霊を受けてないではないか。それではなんの十字架か。十字架と聖霊は離すことができないんだ」

と言っている。

詩篇第1篇でいっているところの、やれ「義人」だ「罪びと」だなんて、そういう相対的な判断はもうひとつ乗り越えてしまう。そんな判断していたら、

「あいつはまだ真実でない」

とかいってすぐ人を品定めする。そんな相対的な判断にいるうちはダメ。自分を義人とも思わない。救われたけれども、なるほど義人として取り扱われるか何かは知らんと。

●キリストの本願の効力に全託

そこへいくと、あの親鸞の『歎異抄』は素晴らしいところにきてます。

「地獄も極楽もおおよそ存ぜぬところ」

なんて言っているんだ、親鸞は。

「天国か地獄か私は知りません。地獄に行ったってどうだって、そんなことは知らん」と。本当に弥陀の本願に任せている。

そういう徹底的な否定道は、キリスト自身が私たちに十字架をもつてこの否定道を拓い



てくださった。そうしたら、これは絶対肯定道になりました。神さまの絶対肯定道に。これを

「一極絶対」

と申します。キリストという、一極がこの絶対であつて、もう他に対するものがない。そこへくるといふと、善悪だの、義だの罪だの、そんなことをもう言っていることがなくなってしまう。キリスト一切です。本当にその中に溶け込んでしまう。

とにかく、そういう一極絶対に入ると、もはや自分の罪なんかをくよくよしていることはなくなってしまう。もちろん、いい加減でいいということではないですよ。それは平伏しの魂でありますけれども。キリストの生命、光、これが浸透してきますから。

これは私の好きな「本願」という言葉がそうなんです。本願の効力がそのことをする。

「キリストの本願の効力」

に自分を全託していく。

「御意を成したまえ」

というのがそれです。「御意を成したまえ」といつて自己を否定するでしょ。

「私の意ではない。あなたの御意です」

といつて、キリストは自己否定をやった、ゲッセマネで。

「あなたの御意がどうぞ私を通して貫いてください」

と。それが十字架にかかつて贖罪の大業を果たされたゆえんです。そうしてまだ御意は続いている。

「復活させて、今度は、お前を天界に上げたら、聖霊をくだすぞ」

と。そこまではです。

「お前を復活させて、本当の生命を見ろ」

と、みんなに見せておいて、それから天界に上がってしまったって、今度は聖霊がくる。この

「十字架・復活・聖霊」

は離すことができない。これが貫いている神の御意です。「御意」なんていう言葉では表せない。むしろ「聖行」といった方がいいくらい。もの凄い神の行為ですよ——こんな言葉は書いたことはないけれども——「始めに行為あり」なんだ。「始めに言葉あり」ではない。人を動かすものは単なる言葉ではない。言行一如の世界です。そういった意味において、真の否定は大肯定になる。

カーライルの“Sator Resartus”（『衣装哲学』〔仕立てなおされた仕立屋〕）が、永遠の否定から永遠の肯定のことを論じていますが。

●孤軍万軍

そうなつてきて、御霊をいただければ、



「神さまの法を、キリストの法を喜んで、昼も夜もこれを憶^{おも}う」

と。いや実に聖書を開けば、直ちに生命の世界に入ってしまう。光が浸透してくる。この言葉の文字の奥からやってくる。文字の奥が読めなかったらダメですよ、行間、文字の奥が読めなかったら。

「この意味はどうだ？」

なんて、意味ばかり考えていたら、くたびれてしまうよな。

要するに、ノア、アブラハム、モーセ、エリヤ、イザヤ、エレミヤ、パウロ、アタナシウス、ダンテ、ルター、内村鑑三はみんな自己を乗り越えて、自己を否定していった預言者たちです。預言者も使徒も同じこと。

無教会というのは教会を否定したでしょ。ダメだよ、そんな否定の仕方をしたら。それは内村先生は、その時の教会の在り方が形式的だからダメだと言った。

「教会なんかなくなつていい。無教会でいい。洗礼も聖餐もいらん。信仰だけでいいんだ」

と。それは気合はわかりますよ。それは信仰だけでいいんですよ、信仰だけで。

「信仰のみの信仰」

なんて、塚本先生がさんざん言っている。けれども今度は、これがお題目になつてしまつてき、

「いったい何ですか、信仰は？」

とまた言いたくなる。

「キリストを本当に受けとるということは、聖霊を受けとらないでなぜキリストを受けとつていえるか。十字架の贖いという命題を受けとつたつてダメだ。

事実として受けとつたら、聖霊は来ざるを得ない。そこをどうしてくれるんだ」

ということ。それで、手島さんや私がそこを突破したら、すっかり除け者にされてしまった。無教会のアウトサイダーが今度は、パウロ・ペテロ・ヨハネの私たちはインサイダーになつた。痛くも痒くもない。まあ余計なことをしゃべりましたけれども。あなた方は無教会なんて知らないから、しょうがないけれども。

私は孤軍だけれども、孤軍万軍で、天界に万軍がいる。そういうことで、君たちも今にやつてくださいよ。私はいつまでもここでやっていませんからね。著作が第七巻くらいになつたら、幕屋は解散。みんなにもう独立してやつてもらおう。私は時々、応援に行く。それこそ自由になりたいよな。

まあそれは約束だか何だか知りませんよ、私は。勝手なことを言っているんだから。先のことは知らん。知らんけれども、そんな気持もあるというはなし。だから、もしそうなたたときに、あなた方が本当に自分でやってくれるなければ。もうそろそろ始めていかなくては。並行したつていいですよ。私は日曜にやっているから、あなた方は土曜でも水曜でも何で



もいいから、大いに始めて具体的に準備をやってくださいよね。もうそれこそ、限定するところを知らんです、この世界は。そういう楽しい世界ですから、どうぞ、皆さんもそういう気持ちで。では、今日はこの辺でいいでしょう。

●祈り

主さま。詩篇150篇、その作者の知れないような、ただ本当にはらわたの声がその詩篇となつて、イスラエル民族の歴史の中に歌われました。詩篇は即ち「テヒリム」「祈りの書」であります。詩篇の第1篇を今日は、平伏して学びましたが、どうぞ、私たちが1篇の中に隠されていたところの、イエス・キリストによるところの、大否定道から大肯定道へと、「即」の世界をいただきまして、感謝いたします。

そのようにして、あなたを喜びとするところには、即ち、聖霊の地下水を生命としているところの、その木のように、常木のごとくに花咲き、実り、あなたのご栄光が一人びとりのその実存を通して、花となり果となつていよいよ祝福してくださいように切に願います。

一切は聖名の栄光であります。ちょうど水が低きに流れるごとく、また火が高きに向かつて燃えるがごとく、私たちの在り方がすべて主の御力によるところの自然であることができますように願ひ奉ります。

本当の自由とは、まさにキリストをいただいているところの、御霊の、生命の、力の、光の、愛の、その自由であることをいよいよ思い、これが人を救い人を助ける自由であることをいよいよ証して行くことができますように切に願ひ奉ります。……

どうぞ、主さま、このようにして、兄弟姉妹たちと共に、ただ福音。この八方塞がり、八方破れのこの日本において、ただ天界からくるところのこの福音だけが、日本人の魂を活かすことを、いよいよ、何をしていても、ここに集まっているところの兄弟姉妹たちを通して、そのことをじりじりと証したまわんことを切に願ひ奉る。

またこれを覚えているところのそここの兄弟姉妹たちが、ただ本ものだけが、キリストにおける本ものだけが、本当にこの神の国を建てていくことを、ひとではありません、自分自身が本当にそれとされて、進んでいくことができますように切に願ひ奉ります。

今、心からの感謝と讃美と希望と、兄弟姉妹たち一人びとりの全身にあふれるそれと共に、聖名により捧げ奉る。アーメン。

